『スパイス』

曲がり角でぶつからなくたって恋は始
まる
街で見かけただけでもうれしくなるこ
とはある
どうせすぐに終わることくらいわかっ
てる
あなたが誰で　どういう人なのかくら
い知ってる
毎日同じ時間に見つけて　毎日同じ時
間に見失う
目が合うことなんかない
そらすのはいつもあなた

だけど
私があなたをどう思ってるかなんて知
らないでしょう?
たぶん
どこの誰かとか　なにをしてるかとか

毎日同じ時間にいることとか　毎日同
じ時間を過ごしてることとか
（ほんの一瞬だとしても　これ以上は）

すべては一人遊びの範疇で
あなたの隣に誰かがいればそれでおし
まい
私になにかあればそれでおしまい

すれ違いざまにぶつかることがなくて
も恋は始まる
近くにいるだけで幸せに思うことはあ
る
きっとすぐに終わるだろうということ
はわかる
すべては一人遊びみたいなもので
あなたが他の誰かといればそれでおし
まい
私の気が変わればそれで

『不自然なガール』

一緒にいても心から笑えるわけじゃな
い
タイミングを見計らって　どっかにい
こうとしてる
まぁ　しょうがないよね　彼女いるし
こんなの相手してるヒマがあるなら
むこうに行ったほうがいいよね

なんて
胸が苦しいな　黙ってても伝わるわけ
なんかないけど
言ったってどうにもならないことばか
りで困る
友達のことなんだけどね、は
本当は自分のことの合図
みんな知ってて　でも口に出さない暗
黙のルール
いつか君に全部伝わればいいのに

本当はどう思ってるかとか
彼女のこととか

なんて

君が困った顔して途方に暮れる前に
席を立って「じゃあね」って言うのは
自分の役目
本当はなにも予定もないけど
まぁ　しょうがないよね　彼女待って
るし
この次の約束もできないまま
手も振らないで　ちょっとだけ笑って
でも後ろは振り向かないで

じゃあね、って

『ワンルーム・ディスコ』

まだ一人分に慣れない
カレーは三日くらい同じもの食べてる
し
コーヒーは飲んでも減らない
借りてくるビデオは君の好きだったも
のばかり

音楽の趣味はあわなくて
あたしの好きなものばかりかけてたか
ら　これは例外
大声で歌って
「下手くそ」ってつっこまれることも
なくて
それはそれでつまらない

大げんかしたわけでもなくて
なにがダメだったわけでもない

これがバンドなら発展的解消とかいう
んだろう
でも二人の仲はそんなにわかりやすい
いいわけで説明できるくらい
簡単なものじゃなかった

掃除もしたし
殺風景な部屋にも飽きてきたから
本棚とか
かわいいスピーカーとか
買うことにする
あいつが置いてった
ミラーボールの置物は
今度のゴミの日に捨てることにして
部屋の外に置いておいたら
いつのまにかなくなってた
なんか悔しかった

新しい街はなんだか
いつまでたっても暗くならなくて

眠るとき以外はそんなにさみしくない
いまのほうが　あたしには合ってる
いつかどうでも良くなるまでは

にらめっこして悩んだけど
ケイタイの番号とアドレスは消した
別にいいや
きっと二度と会うこともないでしょう
会ったって
知らないひとのフリくらいはできるで
しょう
それくらいの覚悟がないと
ひとり暮らしなんか
そうできるもんじゃない

『ねぇ』

勝手に決めたきょうの予定
つきあってくれるってそれだけで
気ばかり焦って　足がもつれそうで
改札を抜けて来た電車に飛び乗って
流れる景色もいまはもどかしくて

初めて会った時から　まだ変わらない
君の前に立つ時の緊張とか
君に話しかけられた時の落ちつかなさ
とか

今日はほんのちょっと特別
あれから二年たって　すこしだけ慣れ
て
記念日っていうにはちょっと恥ずかし
いけど
きっといい日になるって
それだけはわかる　はっきりと

ヘッドフォンから聞こえる音楽と
電車が止まるタイミングが一緒
空いたドアからダッシュで階段
かけ降りるのはさすがにやめにした
気持ちと呼吸を落ち着けて
服とか髪とか直して
必要以上に緩んだ口元にならないよう
にして
改札の向こうには君

この前会ったばかりなのに
久しぶりだねって
わざと見つめたら
目をそらして照れちゃって

うん
ひさしぶりだね
はやく行こうよ
二人だけで行こうよ

『voice』

だらだらと続く坂を自転車に引きずら
れるように降りていく
退屈な毎日はまだしばらく続く
「テンション低いじゃん」
肩をはたいて追い越していく君は
いつも笑っているようで
バスを待つほんの一瞬　曇らせる顔を
見たのは
きっと僕だけだと思う

（思い上がりなのはわかってる）
（僕を見つけてすぐいつもの顔に戻る）
（でもその笑顔はぎこちなかった）

普段はばらばら　一緒にいるとはだれ
も思わないだろう
呼ばれればそっちに行ってしまうし
それは僕も君もそう

だけど本当は　きっと本当は

僕は僕でいつも退屈そうに外ばかり見
て
かなうはずのない夢と現実を一緒くた
にして
なにかから逃げているような　そうで
ないような
わざとつかみ所のないようなフリをし
て
君は君でいつも誰かがそばにいて
まるでそうすることが当たり前みたい
に
疑問に思ったことはないのだろう
そう　知らない人はいうだろうけれど

無理したっていいことなんかないって
口には出さないだけで　やり方が違う
だけで

バスをいくつかやり過ごして
缶ジュースはんぶんこして
クラスのだれも知らない二人だけの話
絶対に教えてやるものか
「内緒なんていつかはばれるよ　どち
らかがいわなくても
どこかから　必ずばれるようにできて
る」

飽きたころに君はバスに乗る
僕は自転車にまたがる
それぞれの方法で　それぞれの場所に
帰る
誰かの知っている自分が　すべてでは
ないのだと
そんなたいしたことのないどうでもい
いことを
カバンのすみにしまって

添嶋文庫
「prfmtrx」
平成二六年五月五日　初版発行
著者　添嶋譲
発行　空想少年は
　　　テキストデータの
　　　夢を見るか？
印刷　言葉の工房

literary-ace.littlestar.jp